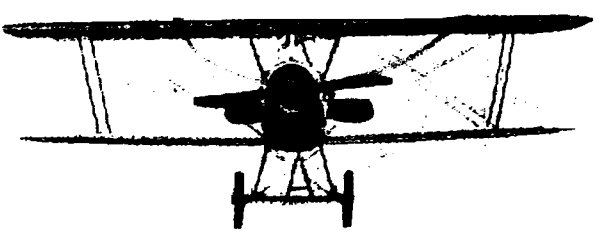
前に立つ空

光岡明

前に立つ空



光岡　明

文藝春秋

前に立つ空

一九八七年二月二五日　第一刷

定価一二〇〇円

著者　光岡明

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋

〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　〇三（二六五）一二一一

印刷　大日本印刷
製本　矢嶋製本

＊万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Akira Mitsuoka 1987　Printed in Japan

ISBN 4—16—309420—2

前に立つ空

装幀　竹内和重

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

一

日本の空は天気が悪くなった。特に大正の時代に入ってから、そうだ。
「明治の時代までは、空はどんなに風が吹いても、公明晴朗だった」
竹男がそういうと、あき子は豊かな白い頬を上げて聞いた。
「明治と大正と、どう違うの」
わからない、という風に、あき子の声音が、竹男の思いこみか、甘えて響いた。
「気塊に分割されたよ」
「キカイ」
あき子が聞いた。
「空気のかたまり」

気塊が空からおろした手で首筋をなでられたように、あき子は身をすくめて空を見上げた。
「同じ千葉でも、こと寒川には寒川の、津田沼には津田沼の、気塊がある。東京にも、静岡にも、大阪にも、そして九州にも、それぞれある。そこで空気がかたまっている」
「なによ気持悪い。たくさん空があるなんて、変ないい方。空は一つでしょうに」
「そりゃそうだ」
竹男をまっすぐ見ていたあき子の目が笑った。だが竹男はまじめに答えた。
「空気だからもちろんつながっているけれども、どこも同じというわけじゃない。それぞれの気塊のご機嫌をうかがいうかがい、飛行機はとぶんだ。飛行機は気塊にとってはたいてい招かれざる客だから、空はいつも機嫌が悪い」
ふたりは千葉海岸に流れ出す都川河口の土手に生えた松林のなかにすわっていた。
空に七月の烈日があった。
松林のなかは軽く乾いていたが、砂浜から海にかけて、空気は煮立っていた。
その空気の揺らぎのなかに、遠く、潮のひいた砂浜で、練習機が一直線の滑走訓練をしているのが見えた。飛行機どしに、べたなぎの東京湾がひろがっている。
「ああやって、空へのごあいさつの仕方を覚えているのさ」
「空のご機嫌が悪いとき、どうなるの。飛行機、落ちるんでしょ」
「そう簡単には落ちないよ。まずとばなきゃいい」

「あの飛行機みたいに」
二十五馬力のアンザニ複葉練習機は、車輪の二条の直線を砂浜に引きながら走っていた。飛行機は砂浜に吸いつけられたように、とび上がらなかった。
「うまくなったな、小出のやつ」
「いまあの飛行機を動かしてるのが、小出さん」
「そう」
「小出さんて、竹男さんたちにくっついて、二、三度、うちの旅館にもとまったことがあるわね。たしか十七、八の若い人でしょ」
「そうだ、小出菊政。こと白戸飛行機練習所のなかでは、いちばん若い」
「道楽者のひとりね」
あき子はそういって首をかしげ、「竹男さんもそうだけど」と、軽くからかった。
練習所長の白戸栄之助がシベリア出征で病を得、後送された広島陸軍病院から帰った最初の晩に、女房の初子とともにとまったのが東京・神田の岩田屋で、それが機縁で練習所の定宿となり、なにか東京でことがあると、練習生たちもそこにたむろした。
あき子は岩田屋の娘だった。娘といっても、出奔同よう同棲した相手の画家が結核で死んで、またふらりと帰ってきたというはなしだった。だれも面と向かって確かめたものはいなかったが、竹男や小出ら練習生の男ばかりの部屋に、気楽に入ってきてははなしに加わっていくさまが、

「やはり男を知っている」ということになるのだった。竹男の先輩になる高橋信夫と、新橋やらどこやら二人きりで歩いていたというはなしもあった。

そんなあき子も加わった雑談のなかから、白戸練習所の一時間あたりの練習費が百二十円ということを知ったあき子は仰天し、「それじゃ、一分間二円じゃないの。二、三年前の米騒動のときでも、一升六十銭だったのよ。ほんとにあんたたちって道楽者ね」ときめつけた。「それにあぶないのでしょ、飛行機なんて。すぐ落ちるんだし。落ちて死んだら一文にもならないのよ。わかってるの、ほんとに気が知れない」とまくし立てられて、座にいた人間は、竹男もふくめて、仕送りをする両親をちょっとの間は思い浮かべたに違いなかった。

「あ、とんだ」

びっくりして、あき子の体が堅くなった。

アンザニ練習機が方向をかえて向かい風になり、走るうちにジャンプしたのだった。砂浜の二条の線が切れた。しかしすぐ練習機はばたんと着地すると、またものうい爆音をひびかせながら走りはじめた。

「ああやって、だんだんとぶの」

「そうだよ、まず飛行機の尻を正しく上げて滑走する。あとは舵を引きさえすれば空へ上がる。フワッとね。だけどあの飛行機じゃとても颯爽ととぶところまではいかない。馬力が小さいから、よちよちだ」

「じゃああやってとび上がると、動かしている人もびっくりするのかしら」
「いや」
竹男はことばを切った。竹男の体に一挙に、離陸する瞬間の無心の感覚がよみがえった。
――ほんのちょっとだけ、車輪が大地を離れる瞬間だけ、神になった感じがする。
しかしこんなこと、あき子にいったら笑われる。あき子は目で返事をうながした。
「きっと、だれでもこのままとびつづけないかな、と思うはずだ。やはり、気塊に抱かれて空をとびたいと思うよ」
「ご機嫌が悪くても」
「そのときは頭を下げながら、ごめんごめんって、必死にね」
「さっきは、ご機嫌が悪いときはとばないっていったじゃないの」
竹男は笑った。
「女にはわからないといいたいのでしょ」
あき子が先回りした。
走りくたびれたこどもが母親のところへ帰るように、練習機は木造の格納庫の前へ近づいていった。格納庫からなん人かの練習生がとび出してきた。発動機がとまると、複葉の下羽根をふんで、小出がとびおりるのが見えた。いれかわりに乗池判治が乗りこんで、また発動機が始動した。
そのようすをしばらく黙って見ていたあき子は、突然、

「ね、どうしてとびたいの」

と聞いた。

この質問を聞くと、竹男はいつも胸があふれかえる。思いがあふれているくせに、ことばにならないということが、この世にはたくさんあるじゃないか。

それに、ことばになる前に、無意識のうちにからだが動くことがある。それは、朝起きるのと、おんなじことだ。眠って力がからだにあふれ、目覚めて使いはたすべく動きだす。だが、それが人間の自然であるだけに、特定の質問への答えといったものにはならない。

「道楽者だからだろ」

竹男は答えて、あき子の顔を見た。

あき子は頭を振って、承知しなかった。

「まじめな嶋田さんらしくない答よ。だって、ほかの道楽だってあるでしょう。それに大正の空は不機嫌で、危険といったのは竹男さんよ」

あき子のことばは竹男を思いがけなく強く押してきた。

——ふざけた答じゃいけないのか、困ったな。

この手の質問はなん十遍、なん百遍と受けた。そのうちの大半は、母親のしづと妹のけいが発したものだ。「なんで、とばなんと」と、ふたりは竹男に向かってお国ことばでくり返した。どうしてとばなければならないのか、というのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

竹男の嶋田家は、九州・熊本の日奈久の山林地主だ。別に飛行機とは関係ない。しづとけいには、若い嶋田家のあとつぎの空をとぶ行動は理解をこえていた。ただ、父親の桂太郎はなにもいわない。

しかし、竹男はあき子の質問の真剣さがうれしかった。

「ドイツにオットー・リリエンタールという人がいて、この人が滑空機を完成した。最後は墜落して死んだけれどね」

あき子は身じろぎせず、聞く姿勢をとっていた。

「その研究の成果を発展させて、アメリカのライト兄弟が発動機をつけた動力機で、一九〇三年、だから明治三十六年、はじめて空をとんだ。いまから十七年前のことだ」

「それで」

「それでって」

あき子はさらに押してきた。飛行機にのってて、追い風に吹かれた感じだった。

「だから、このふたりの前にも、ものはこうすればとぶということを、理論だけで研究した人がいる。イギリスのジョージ・ケイレイという人。まだそのころ、日本は江戸時代だけど」

あき子がうなずいた。ふわりと白い花が動いたようだった。

「翼にかかる重さと、発動機のひっぱる力の関係とか、翼の断面の形とか、尾翼の役目とか、きちんと計算して、これなら空をとぶというもともとの形を考えた。いまでもそのおおもとの計算

は通用するんだ」
「だから」
「うん、だから、どうしてとびたいのかというのは、この人たちに聞けばわかると思うけど。おれなんか偉そうに口をきく資格はないよ」
「ほんとに竹男さんて、まじめね」
あき子は遠く海を見た。いらだたし気な目の色だった。竹男が聞きかえすよりはやく、あき子がまた聞いた。
「そのリリなんとかとか、ライト兄弟みたいに、竹男さんも有名になりたいの」
「有名、だって」
「そんな外国人でなくてもいいわよ。たとえば山県豊太郎みたいになりたいの」
「少し違う」
竹男は二、三度、強く首を振った。
「どう違うの」
なぜだかあき子は突っこんできた。ときどきあき子の気性がわからないときがある。
「もう、飛行機は曲技の時代じゃない、と思っているからだよ」
「曲技の時代じゃないって」
「そうだ」

「じゃ、ただとぶだけ」
「まあね」
「それじゃ、おもしろくないじゃない」
「だけど、役に立つ」
「役に立つって、あのシベリアや青島(チンタオ)なんかの戦争のこと」
「戦争だけじゃない。人を運んだり物を運んだり」
「みせものじゃない、というのね」
「そうだよ、そう思っている」
「飛行機がほんとうに役に立つかしら。宙返りは役に立たないの」
一回やってからそんなこといったら、という笑いが、瞬間、あき子の顔に浮かんだように思えた。
——たしかに、おれは宙返りをしたことがない。
竹男はあき子のことばがこたえた。あき子が急に遠のいていくように思えた。
竹男は岩田屋にいく機会を心まちにするようになっていた。
岩田屋は神田三崎町の古い通りにあった。二階建ての佃煮屋、日覆いを垂らした呉服屋、赤白の飴ン棒をくるくる回している理髪屋、ちっちゃな本屋、作りつけの仕切りガラスのなかに上白、きざら、黒糖と順序よく並べている砂糖屋、俵を積み上げた炭屋、若夫婦がいつも働いている豆

腐屋などが並ぶ通りで、よくこどもたちが馬とびをしたり、羽織を頭からかぶって象遊びをしたりしていた。

白戸の練習生たちが集団で通ると、店先の人やこどもたちが振り返った。竹男はその通りを歩くと心がなごんだ。岩田屋に入って、あき子の姿が廊下のはずれや、二階から庭の植込みごしに一階の部屋に見えただけで、竹男は落ちついた。白戸練習所の練習生たちのあき子評はひどいものだったが、竹男はそれらの評をひとつひとつ、内心で打ち消している自分に気づいていた。出戻りだからどうなんだ、とひとりで力んでいることもあった。

そのあき子が飛行機がとぶところを見せて頂戴と、竹男に申し出てきた。喜んで応じた竹男だったが、そのあき子は竹男ができないのを承知で、宙返りをやってみたら、といわんばかりだった。

——山県のことをいわれて、おれも少し興奮したな。

曲技の時代じゃない、などと啖呵をきった軽薄さが、竹男のからだをすくませるようだった。

竹男は黙った。

山県豊太郎は津田沼の伊藤飛行機研究所の天才といわれる飛行士だ。竹男と同じ二十三歳だが、所長の伊藤音次郎と稲垣知足設計技師が作った鶴羽（つるはね）2号曲技機で、大正八年の五月五日、連続二回の宙返りをやってのけた。昨年のことだ。

それに先だつ四月二十五日に、中島知久平が経営する日本飛行機研究所の尾島飛行場上空で、

ホールスコット百五十馬力の中島式5型機にのった水田嘉藤太が、積年の鬱憤をはらすかのように、民間航空人初の宙返りをしていた。しかし、水田の宙返りは一回きりで、しかも最後の方は風に流され、完全な円を描ききれなかった。

山県は見事な円を描いた。

つづいて五月十日、東京・上野で行われた東京奠都(てんと)五十年記念祝賀会の上空で、今上陛下も見守られるなかを、再び連続ループを描き、記念祝賀飛行の主会場である洲崎飛行場にとび帰っては、二十メートルの風に向かって凧のように、ほとんど垂直に上昇するうち、三たび連続ループをやりとげた。下で見守る者一万人。みな沸いた。

民間飛行士はほかにもたくさんいる。

民間飛行士の草分けであり、研究所を持って後進を指導している白戸栄之助、伊藤音次郎のふたりは別格にしても、いまとんでいる者だけでも、藤原延、玉井照高、小栗常太郎、石橋勝浪、後藤勇吉、謝文達、安岡駒好、佐藤要蔵、安井荘次郎、福長朝雄、福長四郎、それに竹男の兄弟子高橋信夫らがいる。

ほかにも地方でとんでいる者がいる。武石浩玻のようにこれまで墜落して死んだ者、けがをした者、資金がつづかずやめた者、引退した者もいる。それらは有象無象だといわんばかりの山県の名声であった。すべての新聞がその快挙を、大正四年に来日して高等曲技を見せたチャールス・ナイルス、同じく五年に来日したアート・スミスなみか、あるいはそれ以上だと書きたてた。

「竹男さんは山県豊太郎の宙返りは、見たの」
あき子は宙返りにこだわった。
「いや、見てない。おれ、一年志願で、熊本の二十三聯隊に入っていたから」
「そう。わたし、見たわ」
あき子はほほ笑んだ。
「人間が空のかなたで、雲にまぎれるように宙返りできるなんて、講談本の猿飛佐助みたい」
「猿飛佐助」
竹男は思わず笑った。猿飛佐助は真田十勇士のひとりで、忍術使いだ。
——そうだ、だれでも空をとびたい。
竹男は、飛行機の車輪が大地を離れる瞬間の、フワリと無心の状態になる感覚を思い出した。
神になるのか、はたまた天狗になるのか、佐助になるのか、そこのところはわからない。ただ、天と地との間を漂いはじめるのはたしかだ。
「だって、だれにでも引力にひっぱられずに、自由に体を動かしたいという気持はあるわ」
あき子は海を見ながら、しゃべっていた。
「自分の思うところまで、ぴょーんとひとっとびというのは、みんなの夢じゃないかしら」
「なんだ、自分で空をとびたい答が出たじゃないか」
あき子は竹男を見たが、明らかにほかのことに気をとられているようすだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo